

ヤナーチェクとチェコの民族音楽



ヴィシェフラドからの夕景

私はまだ経験がないのですが、プラハの空港に降り立つとスメタナの「モルダウ」が流れてきて、チェコに着いたことをいやが上にも実感するのだそうです。

たしかに「モルダウ」の憂愁をただよわせた旋律を聴くと——同じ組曲で「高い城」と訳される——ヴィシェフラドから眺めた、青い夕闇のせまるヴルタヴァ（モルダウ）川やプラハの街並みが思い出されます。

しかし、チェコの作曲家といって私が最もイメージするのは、スメタナやドヴォルザークではなく、レオシュ・ヤナーチェクです。晩年の傑作である弦楽四重奏曲「クロイツェル・ソナタ」を初めて聴いたとき感じた、広大な空間に音が解き放たれていくような感覚は初めて経験するものでした。また、ミラン・クンデラ原作の映画「存在の耐えられない軽さ」を観たときも、そのストーリーや映像よりも、ヤナーチェクの音楽が印象に残ったものです。

弦楽四重奏曲「クロイツェル・ソナタ」は、トルストイの小説「クロイツェル・ソナタ」を読み、その内容——不義をはたらいた妻を殺してしまう男の告白——に衝撃を受けたヤナーチェクが、その小説をモチーフとして作曲したものです。

小説の中には、妻と若いヴァイオリニストがベートーヴェンの「クロイツェル・ソナタ」を演奏する部分があり、遠くベートーヴェンにまで繋がる糸があります。

「クロイツェル・ソナタ」をはじめとして、ヤナーチェク

の傑作は晩年に集中しています。それは63歳の時に出会った若い人妻カミラ・シュテスロヴァとの道ならぬ恋によってもたらされたといえます。

たしかに、歌劇「イエヌーフア」や「カーチャ・カヴァノヴァ」などは、許されぬ恋の悲劇を描いていますし、もう一つの弦楽四重奏曲「内緒の手紙」も、600通にもおよぶシュテスロヴァとの文通を暗示したものです。

しかし一方で、歌劇「利口な女狐の物語」や「マクロプロスの秘術」、「死者の家」で描かれるような、輪廻や再生、開放という主題も取りあげています。ここには、民族主義運動や独立運動にも刺激されて真にチェコ的な音楽を探求したヤナーチェクの姿が浮かびあがります。

クンデラは「チェコ民族は17世紀及び18世紀に、ほとんどその存在を止めてしまった」といっています。19世紀末に起こった民族主義運動は、独立運動であると同時に、チェコ民族が失われた200年を取り戻す運動であったともいえます。

スメタナやドヴォルザークは、この失われた200年の溝を埋めるための土台を築いた作曲家でした。ヤナーチェクはその土台の上に、民族主義や故郷モラヴィアという土地から受けた影響を消化し、ハプスブルク帝国の文化やロマン派音楽すらも乗り越え、独自の作風を手中にします。それこそが新たな、真にチェコの民族的な音楽、すなわち真に普遍的な音楽であったといえます。